



どこの土嚢を作る作業は重労働。「女性は別の仕事と言われたけれど、あえてスコップを持ちました」と女性チーム。男性チームも休憩を入れながら作業した。



被災した産直生産者をボランティアで支援

京都生協 生協共立社

みやぎ生協の産直生産者が住む地域へ、京都生協と生協共立社がそれぞれの取引先と共に炊き出しと作業支援のボランティアに入った。被災地の復興には長い支援が必要だ。炊き出しや作業支援はその一つである。

みやぎ生協の代わりに産直生産者の住む地域を支援

南三陸町、石巻、気仙沼、亘理町。宮城県の被災地名を見て思うのは、その多くがみやぎ生協の産直生産地と重なることだ。津波被害の惨状に、生産者のあの人は無事だろうかと心配した職員、組合員は多い。通常ならすぐにも応援に駆け付けるところだが、震災ではみやぎ生協も甚大な被害を受けた。応援に行きたくても行ける状況にない。

そこで「みやぎ生協の代わりに産直生産者の住む地域を支援しよう」と日本生協連が呼び掛けたところ、京都生協と生協共立社がそれぞれの取引先と一緒に手を挙げた。

京都ボランティア隊（京都生協・鳥取県畜産農協・大山乳業農協）は、産直生力キと産直養殖銀サケの生産地である南三陸町へ。山形ボランティア隊（生協共立社・大谷果樹組合）は、産直野菜やイチゴの産地である亘理町へ。好天に恵まれた6月第2週、被災地で支援活動を繰り広げた。

921kmを駆け付けた京都ボランティア隊

「震災以降、牛肉食べるの初めてです！」と南三陸町の人たちに喜ばれたサイコロステーキは、鳥取県畜産農協自慢の産直鳥取牛。米は京丹後市の森本アグリ



京都ボランティア隊の炊き出し。ステーキの匂いに歓声が上がると「給水車がなかなか来ない。食事の支度が大変だから、本当に助かる」と喜ばれた。

（京都生協取引先）に提供いただいた。南三陸町は水道復旧がまだ2%で、水がまったく使えないので、京都生協の米の産直提携先である宮城県登米市の農家の大久保さんのところに往路で寄り、水道水を500ℓ分けてもらった。

「震災後すぐに、産直のつながりを通して何か生協らしい支援をしながらかと思いましたが」とボランティア隊を率いる福永晋介さん（京都生協）は言う。普段支援農活動などに取り組んでいる仲間にも呼び掛け急ぎよボランティア隊を組織し、それぞれ休暇を取得して921kmの道のりを駆け付けた。同時にボランティアの公募も開始した。「支援は長く続けていかなければなりませんから」

鳥取県畜産農協も「震災後すぐに支援に行くことを決めた」（橋本幸雄さん）という。それも1回きりではなく「組

合として1年間に3回ぐらいのペースで継続して支援を続けたい」と考えている。そのため「今回のボランティアを次の段取りに生かせるよう、責任者クラスが参加した」と話す。

京都ボランティア隊は、漁港で土嚢に砂利を詰める作業支援も行なった。土嚢は、養殖用の筏につける錘となる。機械が全滅したため昔ながらの人力作業だ。スコップを手に砂利を詰めていく。必要な数は当面60kgの土嚢が約1万個。できるところまでやるしかない。25℃を超える炎天下での作業。体に群がる大量のハエ。漁協からは「慣れない作業だと思おうのでぼちぼちやってください」と言われたという。

「休憩！」福永さんの呼び掛けに、みんなスコップを持つ手を止め、並んだ土嚢の数を確かめる。5袋ずつ束ねているのだが数えきれない。「とにかくいっぱいあります！」。海岸に笑い声が上がった。最終的には800個48t分の土嚢を作り上



京都ボランティア隊と日本生協連は、炊き出しの合間を縫って、避難所で「ふれあい喫茶」も開いた。

げることができた。

産直のつながりで共に支援へ 山形ボランティア隊

亘理小学校避難所前の常設テント。9日朝9時30分、山形ボランティア隊(大谷果樹組合10人、組合員10人、職員5人の計25人)が150人分の山菜汁の材料を運び入れ、調理を始めた。

「今の時季は山菜がうまいがね、山菜汁にしたの。全部自分たちで山から採ってきたんだよ」。大谷果樹組合の志藤みゑ子さんはそう言いつて、昨夜みんなで下ごしらえしたというタケノコやワラビ、ミズを見せてくれた。

生協共立社と大谷果樹組合は、震災後2日に1度のペースでみやぎ生協へおに

ぎりを届けた。生協を通じて沿岸の避難所へ届けてもらうためだ。

今回の炊き出しも大谷果樹組合の組合長である白田富彦さんが、生協共立社の齋藤修さんに「被災地支援活動があったらいつでも声を掛けてくれ」と言うて実現したものだ。

大谷果樹組合は、リンゴの摘果作業で忙しい時期。齋藤さんは、「忙しいのが分かっているけど一緒に炊き出しに行つてほしい」とお願いできるのは、長い付き合いがあるから」と信頼関係の一端をのぞかせる。白田さんも「共立社とは37年、みやぎ生協とも産直リンゴで35年の付き合いがあるからね。当たり前のこと」と力まない。隣人が困っているから助ける。ただそれだけのこと、なのだ。

(文・写真 早坂恵美)

船の共同利用で、 再び志津川に生きる

宮城県漁協志津川支所

佐々木憲雄さん(運営委員会委員長)

阿部富士夫さん(戸倉出張所出張所長)

みやぎ生協とは、1997年から「志津川産生カキ」や「志津川産養殖銀サケ」で「顔とくらしの見える産直」を続けてきた宮城県漁協志津川支所(南三陸町)。今回の震災で、養殖施設や加工場は壊滅的な被害を受けた。船も1,000隻のうち残ったのはたった56隻。半数以上の生産者が「もう海はやめる」と言った。風向きが変わったのは、内陸に打ち上げられた船が、修理して使えると分かったこと、漁協が船の共同利用を打ち出してからだ。

「船を失った弱い生産者の目線で考えました。漁民はみな一人で仕事をするので、共同方式は抵抗がある。だが志津川に海をよみがえらせるには共同でやるしかない。そこで船を共同で購入し、300隻を5年ぐらいのリースで使っていくことにしたんです。すると避難所でその知らせを聞いた生産者の8割が「もう一度やる」と戻ってきたのだという。

カキは稚貝を松島から1,000連ほど購入し、戸倉地区で生産していく。「来年の秋には何とか出荷したい。めっちゃおいしいカキをつくりますよ!」。佐々木さんの顔が意欲でみなぎった。

※ カキの稚貝を付着させるホタテの貝殻の束。1連に40~70枚程度の貝が束ねられている。



「志津川はこれまで何度も災害に襲われ、そのたびに生協さんから支援してもらっている。漁民はね、必ず這い上がりますよ」と力強く話す佐々木さん(写真左)と阿部さん。



手作り味噌の山菜汁を調理する大谷果樹組合のみなさん。翌日の6月10日にも、生協共立社の職員13人と組合員8人が石巻市の山下中学校で炊き出しを行なった。